

特許審査がわかる！重要用語集

序文

特許とは、単に申請すればもらえるものではありません。それは、あなたのユニークなアイデアが本当に「新しい」ものであり、「価値ある」ものであることを、特許庁の専門家である「審査官」に認めてもらうプロセスです。このプロセスは、いわば発明者と審査官との間の知的な対話に他なりません。

この用語集は、その対話を理解し、自分のアイデアを権利として守るための羅針盤となることを目指しています。一つひとつの言葉の意味を丁寧に解き明かし、特許審査の世界への第一歩をサポートします。

第1章：特許の基本要件 - 発明が「新しい」と認められるためのハードル

この章では、特許を取得するための最も基本的で、そして最も重要な2つの要件、「新規性」と「進歩性」について解説します。これらは、すべての発明が乗り越えなければならない最初の関門です。

1.1. 新規性(しんきせい)

- 【意味】
 - 一言でいえば、「まだ世の中に知られていないこと」です。特許を出願する前に、その発明の内容が公になっていない状態を指します。
- 【重要性】
 - 特許制度は、新しい発明を公開してもらう代わりに独占権を与える仕組みです。したがって、既に知られている技術に独占権を与えることはできません。「新規性」は、発明が特許に値するかどうかを判断するための最初の関門であり、特許制度の根幹をなす要件です。
- 【具体例】

- あなたが画期的な調理器具を発明したとします。しかし、特許出願をする前に、その発明について自身のブログで記事を公開したり、学会で発表したり、雑誌の取材で紹介してしまった場合、その発明は「公に知られた」ものとなり、「新規性」を失ってしまいます。

1.2. 進歩性(しんぽせい)

- **【意味】**

- 「その分野の専門家(当業者)が、既存の技術から簡単に思いつかないこと」を指します。単に新しいだけでなく、従来技術からの進歩の度合いが問われます。

- **【重要性】**

- 「新規性」が「新しいか」を問うのに対し、「進歩性」は「容易に思いつけるか」を問います。この要件があることで、誰でも思いつくような当たり前の改良(例えば、単に色を変えただけ、材質を少し変えただけなど)にまで独占権が与えられるのを防ぎ、技術の健全な発展を促す重要なフィルターとして機能します。

- **【具体例】**

- 例えば、既存の洗剤 A(油汚れに強い)と、既存の洗剤 B(水垢に強い)が知られていたとします。これらを単に混ぜ合わせただけでは、通常は進歩性が認められません。しかし、もしその混合物が、誰も予測しなかった「金属の錆を防ぐ」という全く新しい効果を生み出した場合、それは単なる寄せ集め以上の技術的価値があると判断され、進歩性が認められる可能性が高まります。

章の結び

この二つの関門を突破する可能性を秘めた発明。しかし、その価値は、審査官に正確に伝わらなければ意味がありません。次章では、その想いと技術を形にするための、出願の骨格となる重要書類を見ていきましょう。

第 2 章：出願の骨格となる重要書類

この章では、出願人が発明の内容を審査官に正確に伝えるために作成する、最も重要な 2 つの書類、「明細書」と「請求項」について解説します。

2.1. 明細書(めいさいしょ)

- 【意味】
 - 発明の内容を文章や図面で詳細に説明した書類で、いわば「**発明のレシピ本**」あるいは「**取扱説明書**」のようなものです。
- 【役割】
 - 明細書の最も重要な役割は、その分野の専門家が読んだときに、**その発明を再現できる(作ったり、使ったりできる)レベルで、詳細かつ明確に記載されている**ことです。これにより、特許期間が終了した後、その技術が社会の共有財産として活用されることが保証されます。
- 【構成要素】
 - 明細書は通常、以下のような要素で構成されます。
 - **発明の名称**: 発明の内容を簡潔に表すタイトル。
 - **図面の簡単な説明**: 添付する図面が何を示しているかの説明。
 - **発明の詳細な説明**: 発明が解決しようとする課題、その解決手段、効果などを具体的に記述する中心部分。

2.2. 請求項(せいきゅうこう)

- 【意味】
 - 出願書類の中で**最も重要な部分**であり、「特許として権利を主張したい発明の範囲」を定義した文章です。明細書が発明の全体を説明する「教科書」だとすれば、請求項は其中最も重要な「**権利の宣言文**」です。
- 【重要性】
 - 請求項は、特許権の効力が及ぶ範囲を定める「**権利書**」そのものです。例えば、土地の権利書が「どこからどこまでが自分の土地か」という**境界線**を明確にするように、請求項は「どの技術的範囲が自分の権利か」を明確にします。この請求項に書かれた範囲の外では、他者は自由にその技術を使うことができます。

- 【明細書との関係】

- 請求項に書けるのは、明細書にその発明が実現可能であると十分に記載された範囲内に限られます。明細書がいわば「発明の全体像を示す地図」だとすれば、請求項はその地図の中から「ここからここまでが私の領地です」と宣言するための、根拠の伴った境界線なのです。

- 【具体例】

- 請求項に「A という部材と、B という部材と、C という部材から構成される椅子」と記載したとします。
- この場合、他者が「A と B のみから構成される椅子」を製造・販売しても、あなたの権利範囲には含まれないため、権利侵害にはなりません。権利範囲は、請求項の書き方一つで大きく変わるため、極めて慎重に作成されます。

章の結び

これらの書類が提出されると、いよいよ審査官による審査が始まります。次章では、その具体的なプロセスを見ていきましょう。

第 3 章：審査官との対話 – 審査プロセスを理解する

この章では、特許庁の審査官と出願人の中で交わされる審査の具体的な流れと、そこで使われる重要な用語を解説します。特許取得は、この「対話」を乗り越えるプロセスです。

3.1. プロセスの登場人物と道具

用語	説明
審査官 (しんさかん)	特許出願の内容を審査し、法律や技術的な観点から特許を与えるかどうかの専門的な判断を行う特許庁の職員。

審査基準 (しんさき じゅん)	審査官が判断を下す際の公式なルールブック。新規性や進歩性などをどのような基準で判断するかが定められており、審査の公平性を保つ役割を果たします。弁理士や企業の知財担当者は、この審査基準を読み解くことで審査官の思考プロセスを予測し、効果的な応答戦略を立てます。
引用文献 (いんよう ぶんけん)	審査官が出願された発明の新規性や進歩性を否定するために引用する証拠資料。特許公報、学術論文、技術雑誌などがこれにあたります。
周知技術・慣用技術	周知技術: 特定の文献にはなっていないまでも、その技術分野で広く知られている技術。 慣用技術: 広く知られているだけでなく、当たり前に使われている技術(例: ネジで固定する技術など)。 これらも進歩性を判断する材料として考慮されます。

3.2. 審査官からの通知

- 拒絶理由通知(きよぜつりゆうつうち)
 - 審査官が審査した結果、「このままでは特許にできません」と判断した際に、出願人に送られる通知です。
 - ここには、「なぜ特許にできないのか」という具体的な理由が、引用文献などを示しながら詳しく書かれています(例:「引用文献1に記載された発明と同じなので、新規性がありません」など)。
 - 多くの出願にとって、この拒絶理由通知を受け取ることが、審査官との対話の本格的なスタート地点となります。

3.3. 出願人の応答

拒絶理由通知を受け取った出願人は、指定された期間内に応答する必要があります。その際の主な手段が「意見書」と「手続補正書」です。

用語	役割	具体的な内容
意見書(い けんしょ)	反論するた めの書類	審査官の指摘が誤っていると主張します。例えば、「審査官が引用した文献に書かれていることと、私の発明はここが違います」といった形で、論理的に反論を組み立てます。
手続補正書 (てつづき ほせいしょ)	発明の内 容を修正す	審査官の指摘を認め、その指摘を回避するために発明の内容を修正します。例えば、請求項の範囲を狭める(限定す

	るための書類	る)ことで、引用文献に記載された技術との違いを明確にし、拒絶理由を解消します。
--	--------	---

多くの場合、この「意見書」による論理的な反論と、「手続補正書」による権利範囲の戦略的な修正を組み合わせ提出します。これが審査官との対話を有利に進めるための、出願人の腕の見せ所です。

3.4. 最終判断

出願人の応答を踏まえて、審査官は最終的な判断を下します。

- **特許査定(とつきよさてい)**
 - 出願人の意見書や補正書によって、当初の拒絶理由がすべて解消されたと審査官が判断した場合に出される、「**特許を認めます**」という最終結論です。
- **拒絶査定(きよぜつさてい)**
 - 意見書や補正書を提出しても、最終的に拒絶理由が解消されないと判断された場合に出される、「**特許は認められません**」という最終結論です。

章の結び

このように、特許審査は一方的な判断ではなく、出願書類という土台の上で、審査官と出願人の間の緻密な対話によって成り立っているのです。

おわりに

本用語集では、発明が「**新規性**」と「**進歩性**」という本質的な価値を持つことを前提に、その内容を「**明細書**」で詳細に裏付け、「**請求項**」で権利範囲を定義し、審査官からの「**拒絶理由通知**」という問いかけに対して「**意見書**」と「**手続補正書**」を用いて対話し、最終的に「**特許査定**」というゴールを目指す、知的な旅路の地図を描きました。

これらの言葉は、単なる専門用語ではありません。あなたのユニークなアイデアや努力の結晶を、社会に認められる「知的財産」へと昇華させるための、重要な道しるべです。この用語集が、そのための力強い第一歩となることを願っています。